

行方郡井上長者館跡確認調査報告書

1990・3

玉造町教育委員会

行方郡井上長者館跡確認調査報告書

1990・3

玉造町教育委員会

序

玉造町の考古学の歴史は、昭和30年の三昧塚古墳の発掘調査にはじまります。その後も昭和30年代から40年代にかけて発掘調査や考古学史上重要な発見が相次ぎました。

そのひとつに、玉造町大字井上字長者郭周辺に所在する井上長者館跡の発見があげられます。この遺跡は、字名でもわかるように第2次世界大戦までは、土塁や堀もしっかり残りその存在も地元では語り継がれてきました。しかし、戦後の食糧増産に伴う開墾によって木々は伐採され、大地は平坦に均されてしましました。

その後、昭和37年に県農地課で農地台帳を整備のために空中写真を撮影したところ、100m四方以上にも及ぶ二重に堀をめぐらした館跡が確認されたのでした。一時期沈黙していた遺跡が新しい考古学調査の方法を提示したのでした。

この度、この遺跡が県道芹沢麻生線に隣接しているため宅地や工場、そして新たな幹線道路の計画と開発が周辺に及んできていることから、緊急に発掘確認調査をすることになりました。

尚、この調査にあたっては、文化庁並びに茨城県教育庁文化課のご理解を賜り、国庫補助と県費補助事業として発掘調査を実施することができましたこと心より御礼申し上げます。また、悪条件の中の調査を遂行していただいた岩松和光先生に深く感謝いたします。

平成2年3月

玉造町教育委員会教育長 渡邊正則

例　　言

- 1 本書は茨城県行方郡玉造町大字井上 2439-8 他に所在する井上長者館跡の確認調査報告書である。
- 2 調査は玉造町教育委員会が主体となり、玉造町遺跡調査会（会長 並木亨）を組織、岩松和光が担当した。なお、今回の確認調査は文化庁並びに茨城県費補助事業である。
- 3 調査は平成元年12月14日から平成2年1月27日まで実施され、この間5本のトレンチ（総面積 200.4 m²）調査と、教育委員会小谷和弘主導のもと現況図の作成（S = 1/200、0.5 m コンター）を行なっている。整理作業は町立図書館で進められ、遺物・図面は町教育委員会で保管されている。
- 4 本書の作成は岩松指導のもと遺物実測を沼田洋子、トレースを原喜代子、拓本版組みを小島清子・鬼沢正子が協力してあたった。本文執筆は I-(1)を教育委員会高埜栄治が行ない、他の文責は総て岩松にある。
- 5 調査にあたっては大勢の方々から助言・御指導・協力を戴き、寒中の現場に暖をあたえて戴いた。記して感謝の意を表したい。

（敬称略）調査主任 岩松和光（日本考古学協会員）

　　調　　査　　体　　制　　　　　　　　　　　（敬称略）

協　　力　　者　　県文化課、田口崇、小田切昭丸、川崎隆由（鹿島町遺跡調査会）

　　石川吉夫、磯山尊資、浅野政雄、飯田博俊、田中教子、小沼ふく、斎藤重雄、菊田浩基、田山信男、成島謙二、野原幸之助

（発掘調査参加者）

　　菊田浩基、田山信男、成島謙二、野原幸之助（遺物整理）

　　郡司好隆（西谷区長）野原一男（新田区長）飯田廣（竹ノ塙区長）

　　田中正吉、田上和子、塙愛子、塙利子、関野仁一、田中勇男、

　　田中時次、金塙昇、関野孝之、石川吉夫（以上土地所有者）

調査主任 岩松和光（日本考古学協会員）

調　　査　　員　　並木亨、成島謙二、野原幸之助、田山信男

（以上玉造町文化財保護審議会委員）

事　　務　　局　　玉造町教育委員会

　　渡辺正則（教育長）、石橋静男（教育次長）、

　　中田邦雄（社会教育係長）、高塙義夫（社会教育指導員）、

　　高埜栄治（社会教育主事）、小谷和弘（社会教育主事）

目 次

序

例言

I 調査の契機と経過	1
(1) 調査にいたる契機	1
(2) 日誌抄	2
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の成果	6
(1) 調査の方法	6
(2) 各トレンチの遺構	6
a 西第1トレンチ	6
b 南トレンチ	13
c 北トレンチ	13
d 西第2トレンチ	14
e 東トレンチ	14
(3) 遺構の規模	16
(4) 遺構内検出遺物・表採遺物	16
IV おわりに	18

挿 図 目 次

第 1 図 井上長者館跡（航空写真）	1
第 2 図 調査風景	2
第 3 図 玉造町の城館址と古瓦散布地	5
第 4 図 遺跡現況図	7 ~ 8
第 5 図 東、西（第 1・2）、南、北トレンチ検出遺構実測図	9 ~ 12
第 6 図 東トレンチ外堀遺物出土状況	15
第 7 図 遺構内検出遺物・表採遺物	17
第 8 図 絵図－「高野（助）家文書」より	18

図 版 目 次

P L 1. 井上長者館跡の現況（航空写真）
P L 2. トレンチ全景
P L 3. 堀検出状況（東・西第 2 トレンチ）
P L 4. 堀検出状況（南・北トレンチ）
P L 5. 出土遺物・表採遺物

I 調査の契機と経過

(1) 調査に至る経緯

井上長者館跡は、茨城県行方郡玉造町大字井上長者郭周辺に所在している。地元では金塚長者とも呼ばれその存在は戦前まではよく伝えられてきている。

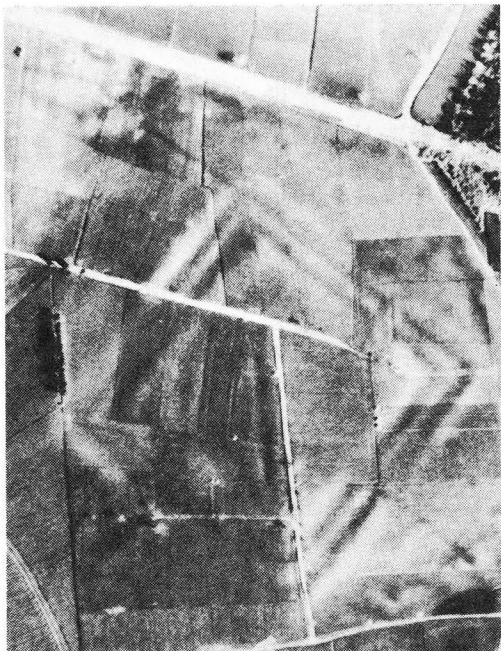
遺跡は、行方台地の尾根に位置し現在では北浦村境になっている。遠く古代には駅路沿いに立地していたものと推測される。

最近、この行方台地の尾根を走る県道芹沢麻生線が霞ヶ浦大橋の開通により一段と交通量が増大し、それに伴い住宅や工場の開発や行方縦貫道路建設計画等が浮上してきた。

井上長者館跡は、この幹線に隣接しているため周辺もにわかに開発が進んできており、考古学史上重要な当遺跡を保護保存するためにも遺跡の規模や性格を至急調査しなければならなくなつた。

以前に調査したとされる学習院大学には、当遺跡を語る遺物や図面等はないとのことであり、全国的に知られている遺跡にもかかわらず参考資料皆無であることは非常に残念であった。

こうした状況を踏まえ、県教育庁文化課に緊急の確認調査の必要性を説明するとともに指導をいただいた。今回の調査は、以上の観点から文化課の指示のもとに文化庁の協力を得て、国庫補助並びに県費補助事業として緊急の発掘確認調査をする運びとなつたのである。また、土地所有者や地元関係者の支援と協力をもって調査を実施できたことを付記しておく。



第1図 井上長者館跡

(2) 日誌抄

- 12月14日 BMの移動、玉造町 2,2267 → H = 32.312 m より調査基点 0 → H = 33.459 m へ移す。
- 12月15日～16日 方眼杭打開始。
- 12月18日～19日 方眼杭打終了。現況図作成開始。
平板測量 S = 1/200、0.5 m コンタ
- 12月20日 地鎮祭、午後西第1トレンチ調査開始。
- 12月21日 南トレンチ調査開始。西第1トレンチでピット2基検出。
- 12月22日～25日 東トレンチ調査開始。南トレンチで内堀・外堀を検出。
- 12月26日～27日 北トレンチ調査開始。東トレンチ外堀一括遺物検出。
- 12月28日～29日 北トレンチ平・断面実測完了。年末年始休暇に入る。
- 1月8日 東トレンチ一括遺物等実測。
- 1月9日 東トレンチ、北トレンチ完堀状況写真。
- 1月10日 東トレンチ出土遺物とり上げ。
- 1月11日 西第2トレンチ調査開始。
- 1月12日～13日 東トレンチ遺物とり上げ。
現況図作成。
- 1月14日～15日 現況図作成。
北トレンチ埋め戻し。
- 1月17日～23日 西第1トレンチ、西第2トレンチ、東トレンチ、南トレンチ平・断面図実測完了。完堀状況写真（西）。遺物整理作業。
- 1月26日～27日 東トレンチ、西第1トレンチ、西第2トレンチ、南トレンチ埋め戻し。現況図作成。現地説明会。



第2図 作業風景

Ⅱ 遺跡の立地と環境

井上長者館跡は、行方郡玉造町大字井上 2439-8 他に所在し、町の遺跡登録番号は 24（県 1517 番）である。町内には 70 を越える遺跡が登録されているが、縄文時代では前～後期にわたって遺物の認められる若海貝塚やオチャク内貝塚^(註1)が梶無川沿いに展開する他、玉造城址（1）では弥生後期の遺物も認められる。梶無川は古代茨城・行方の郡境でもあったが勅使塚古墳・三昧塚古墳・大日塚古墳といった有力古墳の展開する沖洲地区は本河川の北西部にあたっている。玉造町は、この他にも取り上げるべき遺跡に恵まれた地域であるが、中でも今回調査の実施された井上長者館跡は遺構がもつ壮大な構えにより世間の耳目を集め注目された遺跡である。発見は昭和 37 年に地籍調査の目的で撮影された一枚の航空写真がその発端であるが、耕地に刻まれた鮮明な遺構像は町内の「高野助右衛門家」文書に残る「金塚長者郭の図」（第 8 図参）と一致することから更に話題を呼び、「発掘調査」まで行なわれたようであるが真偽の程は定かでなく調査記録も残っていない。^(註2)

本址（A）が立地するのは町内の南、玉川地区の台地上標高 33m の地点で台地西側縁辺には、谷津筋ごとに溜池が認められ、本址の北西谷津奥にも扇沢池・大清水池がみえるが、南面に切れ込む谷筋では昔清水が湧いていたという。東側は県道芹沢－麻生線を狭んぐる北浦村である。この県道の沿線には本址の北へ向って唐ヶ崎長者館跡、手賀長者館跡（C）と合せて三つの長者伝説をもつ遺跡があるが、唐ヶ崎長者館跡では常陸国分寺系の瓦がでるといわれ、本址でも布目瓦片を採集している。古瓦はこのほかにも井上廃寺跡（B）から素文緑単弁葉華文軒丸瓦と素文軒平瓦が知られており、手賀廃寺（H）においても遺跡の性格は別にして古瓦が出土する。現在も信仰をあつめる天台宗戸羅度山西蓮寺の縁起も古く、その建立は延歴元年（782 年）といわれるが、その位置は現在の山門よりやゝ東の戸羅度廃寺跡（9）が比定されている。このように井上長者館跡の周辺地域に古瓦を出土する遺跡が集中することは、行方郡内における律令制の波及とその具体化の中でこの地域が中心的な役割を果たしたことを物語っているばかりでなく、その複雑な様相をも同時に示唆しているものである。

『常陸国風土記』によると行方郡の件はまず建郡経過にはじまり、「行細」命

名の由来、茨城郡境である梶無川・カモノの由来等を述べたあと、郡家の記載にうつるが、これによると「……郡東国社、此号縣祇、**社**中寒泉、謂之大井、……基地、昔有水之沢、今遇霖雨、庁庭湿潦、郡側居色、橘樹生之……」とあり、この土地が昔沢地であり、今でも幾日か雨が降り続くと郡庁の庭に水がたまるという記述が出てくる。『常陸國風土記』の成立は8世紀の初頭とみられるから、風土記編さん当時の行方郡庁は湿地に立地していたことが窺われる。風土記はこの後郡家の西北に位置する「提賀」^{チガ}の里に就いて触れ、更にこの北の「曾尼村」に「驛家」を置いたと記述する。これに続く件が継体朝の「……箭括氏**麻多智**、……墾開新治田……」の記事と孝徳朝の「壬生連磨、初占其谷、令築池堤、……」という二つの開発に纏る伝承記事である。6世紀代にはじまる麻多智や連磨等による新田の開発と池堤の構築は同時に先住者との間に衝突を招いたが、彼らは着実に力をつけ、当地を行方郡の中心地たるべく地盤を築いてゆくのである。

註 1 玉造町教育委員会「玉造城本丸発掘調査報告書」
1990.3

註 2 玉造町郷土文化研究会編
「玉造町史料写真集」
1976.3 p 97 に当時の記録として載っている。

註 3 玉造町史編さん委員会
「玉造町史」 p 127

註 4 茨城県史編さん原始古代史部会「茨城県史料・古代編」p 302 の解題に拠った。

	名 称	県 番	町 番	備 考
1	玉 造 城 跡	1497	5	
2	手 賀 城 跡	1498	6	
3	芹 津 城 跡	1499	7	
4	沖 洲 館 跡	1500	8	
5	羽 生 館 跡	1501	9	
6	野 口 館 跡	1502	10	
7	山 中 館 跡	1503	11	
8	鳥 名 木 館 跡	1504	12	
9	小 貫 館 跡	1505	13	
10	塙 館 跡	1506	14	
11	箱 根 館 跡	1507	15	
12	捻 木 館 跡	1508	16	
13	蕨 館 跡	1509	17	
14	原 田 館 跡	1510	18	名称一部訂正
15	石 神 館 跡	1511	19	
16	高 須 館 跡	1512		湮滅
17	人 見 館 跡	1513	20	
18	岡 部 館 跡	1514	21	
19	右 近 館 跡	1515	22	
20	若 常 館 跡	1521	27	名称変更(旧、姥ヶ谷長者館跡)
21	稻 荷 館 跡	5175	62	
22	藤 井 平 館 跡	5176	63	
23	諏 訪 館 跡	5177	64	
24	京 ノ 内 館 跡	5178	65	
A	井 上 長 者 館 跡	1517	24	名称一部訂正
B	井 上 廃 寺 跡	1495	3	
C	手 賀 長 者 館 跡	1516	23	
D	尺 羅 度 廃 寺 跡	1496	4	名称変更 (旧、旧西蓮寺跡)
E	姥 ケ 谷 長 者 館 跡	1519		昭57、湮滅
F	原 遺 跡	1520	26	昭57、一部湮滅
G	緑 ケ 岡 廃 寺 跡	1493	1	
H	手 賀 廃 寺 跡	1494	2	名称一部訂正
I	金 久 保 遺 跡	1524	30	
J	金 場 遺 跡	1525	31	
K	六 十 塚 遺 跡	1511		湮滅
L	藥 師 廃 寺 跡	3952	60	伝承のみ



第3図 玉造町の城館址と古瓦散布地

III 調査の成果

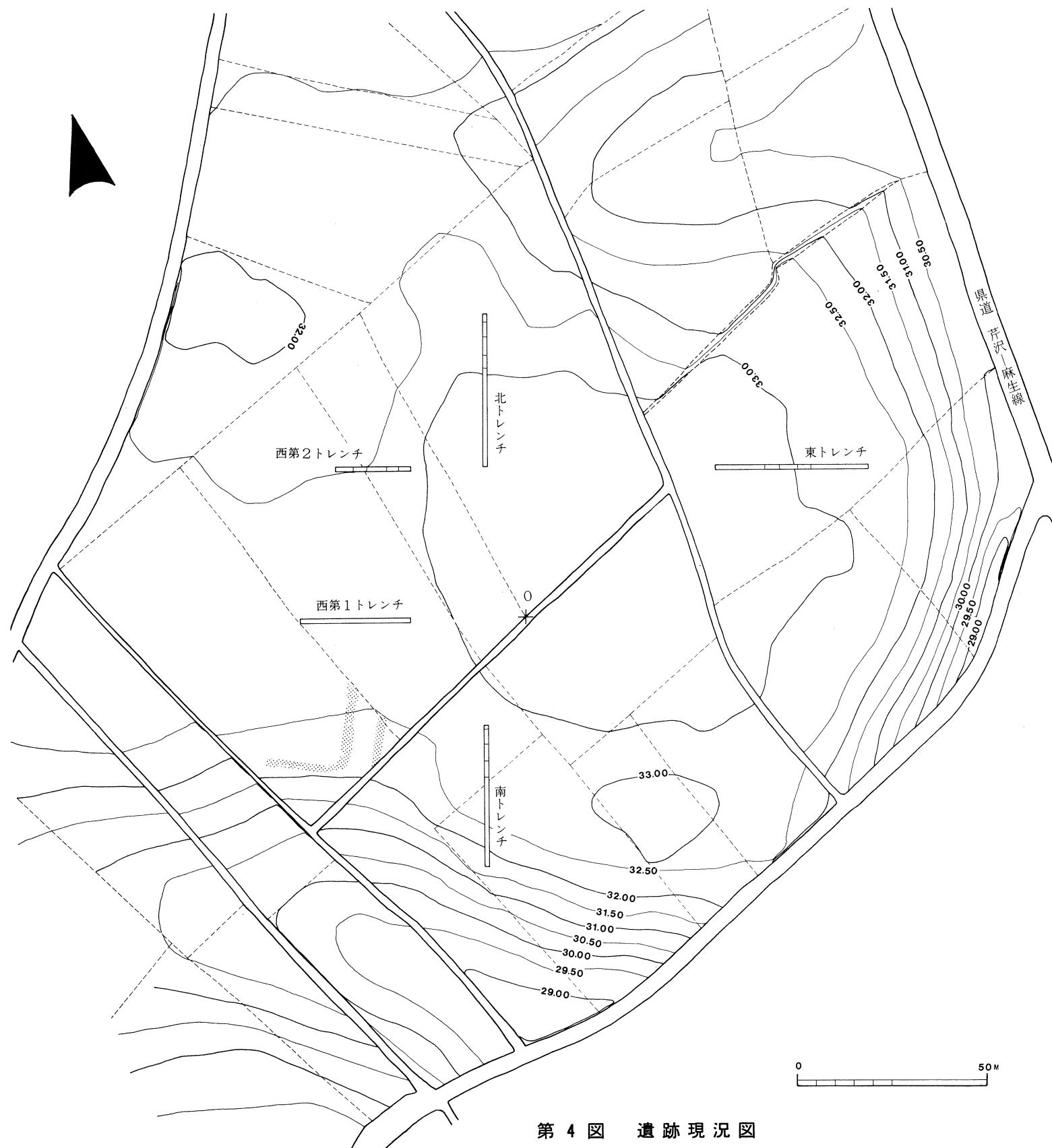
(1) 調査の方法

今回行なわれた調査の主目的は遺跡の現況を把握するとともに、二重にめぐる堀の正確な位置関係とその規模を知ることにおかれている。航空写真に浮び上る端整な方形プランの鮮明なイメージとは裏腹に、長年に亘って畠地となっている現地の状況から遺構を視認することは困難である。昭和59年、町教委によって堀の各コーナー部と郭中央寄りの地界に井上長者館跡の標識柱がたてられているが、これは写真像と地籍図を照合し設定されたものである。調査は、この中央標識柱脇を基点(0)とし、本址の主軸方位に極力沿うように、まず東西基線を設定した後、これと直角方向に南北基線を設けた。南北線の方位は、N(磁北) - 15° - Eであり、対象地域内には $40 \times 40\text{ m}$ の方眼杭を打って調査の便を企った。トレンチは想定される堀の位置に 1.2 m 幅をもって、西辺に2本、東・南・北辺に各1本の計5本を最終的に配置している。

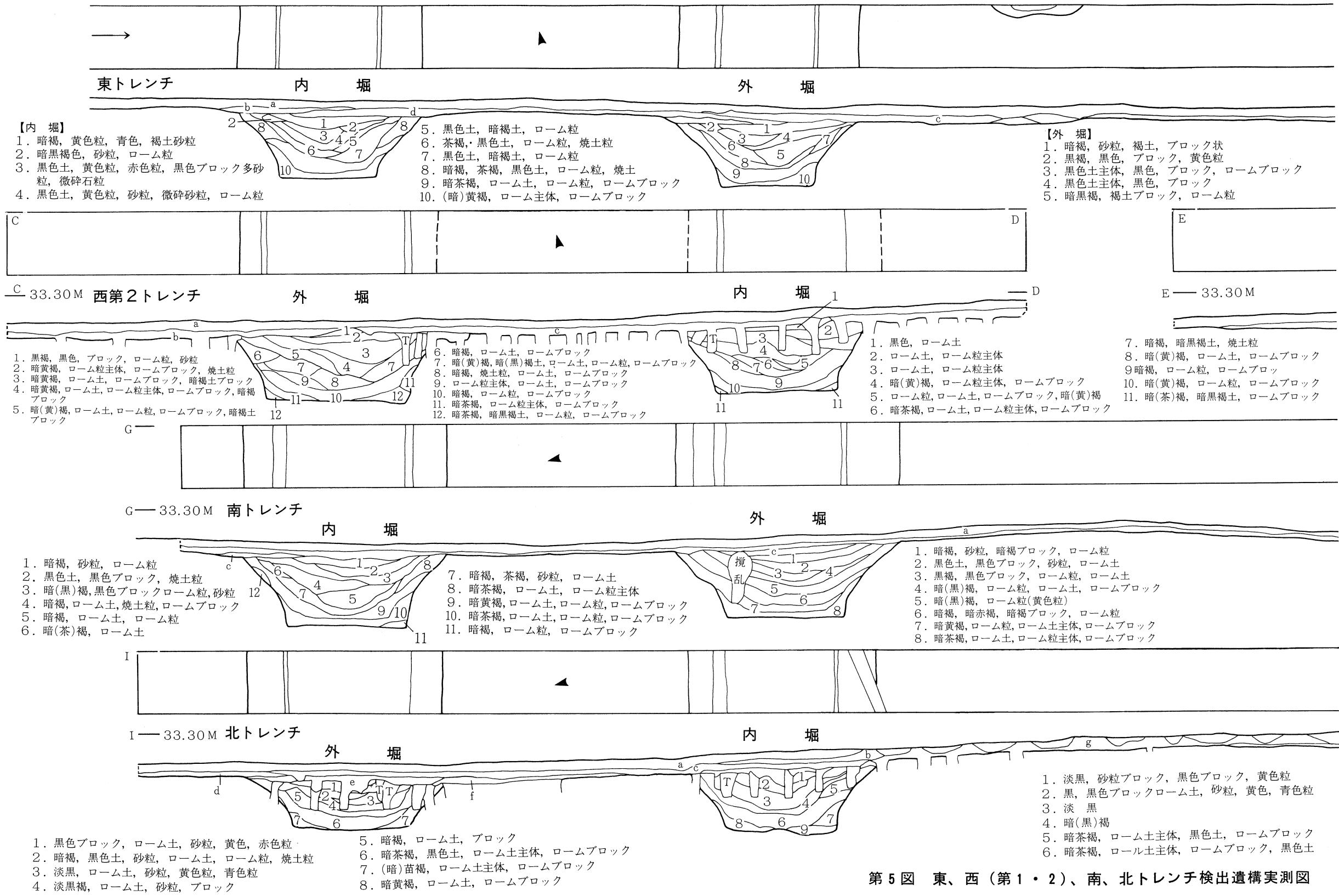
(2) 各トレンチの遺構 (第4~6図 PL 2~4)

a 西第1トレンチ

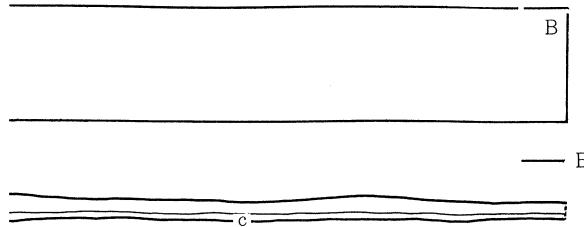
トレンチの規模は $1.2 \times 29\text{ m}$ である。検出された遺構はP1・P2の二基である。P1の規模は径 0.5 m 、深さ 0.75 m を測り、覆土最下層は堅く締った灰暗褐土である。P2は、径 0.4 m を測り、深さは 2.4 m の地点でも底にたっしない。P1は柱痕を検出できないものの柱穴と考えられるが、P1とP2では異質な感があり、同時代性はないものと思われる。最初に開けたトレンチでありトレンチャーの搅乱もひどいことから、堀想定部分を深く掘り下げたが、断面図にみる1・2層は地山ロームであり、本トレンチの範囲には堀は存在しないことが確認されている。西辺の陸橋部分と考えられる。



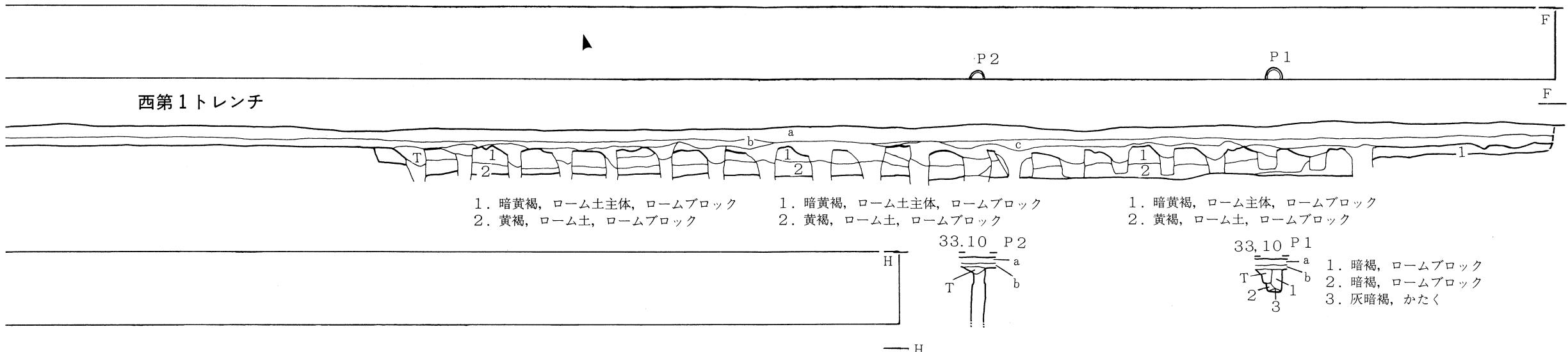
第4図 遺跡現況図



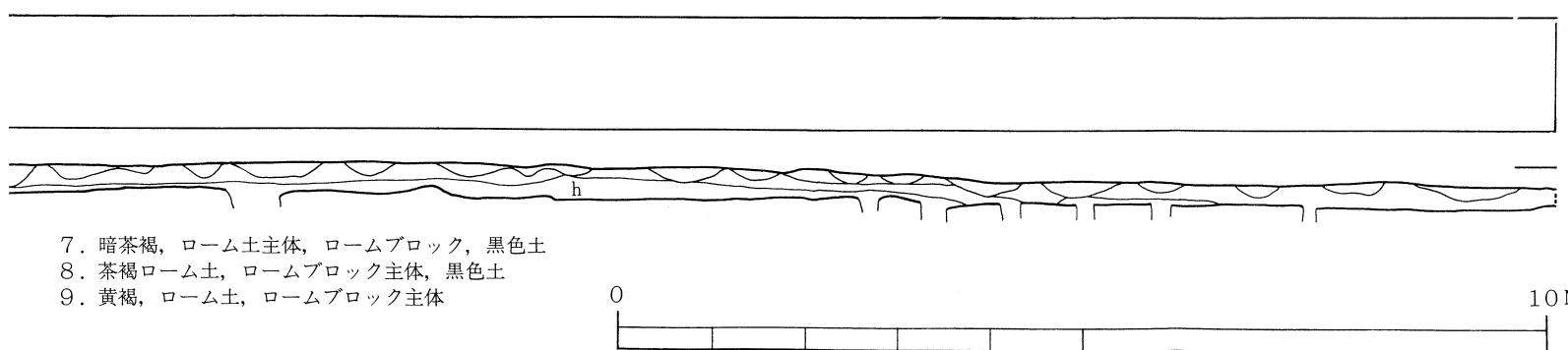
第5図 東、西(第1・2)、南、北トレンチ検出遺構実測図



6. (暗) 黒褐, 黒色, 多黄色, 赤色粒
7. 暗(茶)褐, ローム土, ローム粒
8. 黒色土, 茶褐色土, ローム土, ローム粒
9. 茶褐色土, ローム土, ローム粒主体, ロームブロック
10. 暗茶褐色土, ローム土, ローム粒, ロームブロック



※土層 a ~ h は耕作土



b 南トレント

トレント（ $1.2 \times 38m$ ）は中程より南谷津へ向かっての緩傾斜が認められる。トレントとほぼ直交するように二本の堀を検出している。内堀の規模は確認面の幅が $3.98m$ 、深さ $1.5m$ 、底幅 $2.3m$ を測る。断面は逆台形状を呈しており、法面はほぼ平坦な底面から反り気味に開く。外堀もほぼ同様の形態で掘り込まれており、規模は幅 $4.37m$ 、深さ $1.3 \sim 1.5m$ 、底幅 $2.24m$ を測り、やゝ南側法面が開く。両堀は $4.5m$ の間隔をもっており、南辺内郭から外周外上端までの距離は $12.8m$ を測る。土壘はまったく遺存しないが、堀の覆土下層部に堆積する黄（茶）褐系統の土が土壘の崩落土であると思われる。内・外堀とも似たような堆積状態（自然堆積）を示しており、下層部の堆積土には殆ど黒（暗）褐系の土は混らない。内堀の8～12層は内郭側と南側の両方向からの流れ込みと思われ、外堀ではやゝ北側（中土壘）からの流れ込みが多い（6～8層）。更に土層の観察では堀底にヘドロ状堆積物はまったく検出されておらず、内・外堀とも空堀であった可能性が強い。遺構の占地が高所であり、堀底が粘土層に達していないことからみて、本址の二重堀が貯水機能の役割を果たした可能性は低いと考えられるが、一概に否定できない要素もある。遺物は須恵器壺蓋の鉢（第7図-1）を覆土中層（4層）より検出している。他に検出遺構はない。

c 北トレント

ここでもトレント（ $1.2 \times 40m$ ）に直交する二本の堀を検出する。内堀の規模は幅 $3.6m$ 、深さ $1.3m$ 、底幅 $2.13m$ を測り、外堀は幅 $3.85m$ 、深さ $1.0m$ 、底幅 $2.21m$ である。断面形態は南トレントと同様に平底の逆台形を呈するが、外堀は郭外への立ち上りがやゝ開き気味となる。内・外堀の間隔は $4.9m$ を測り、北辺内郭から外周外上端までの距離は $12.3m$ である。覆土は内・外堀とともに大きく黒（褐）系統（1～4層）と暗黄（茶）褐系統（5～9層）の土に分れる点は南トレントと同様であり、北辺においても土壘は存在したと考えられる。遺物は内堀の覆土中層より土師器甕片（第7図-h）を検出している。本トレントは内郭部分へ $20m$ 程入り込んだが、ほかに遺構は検出されていない。

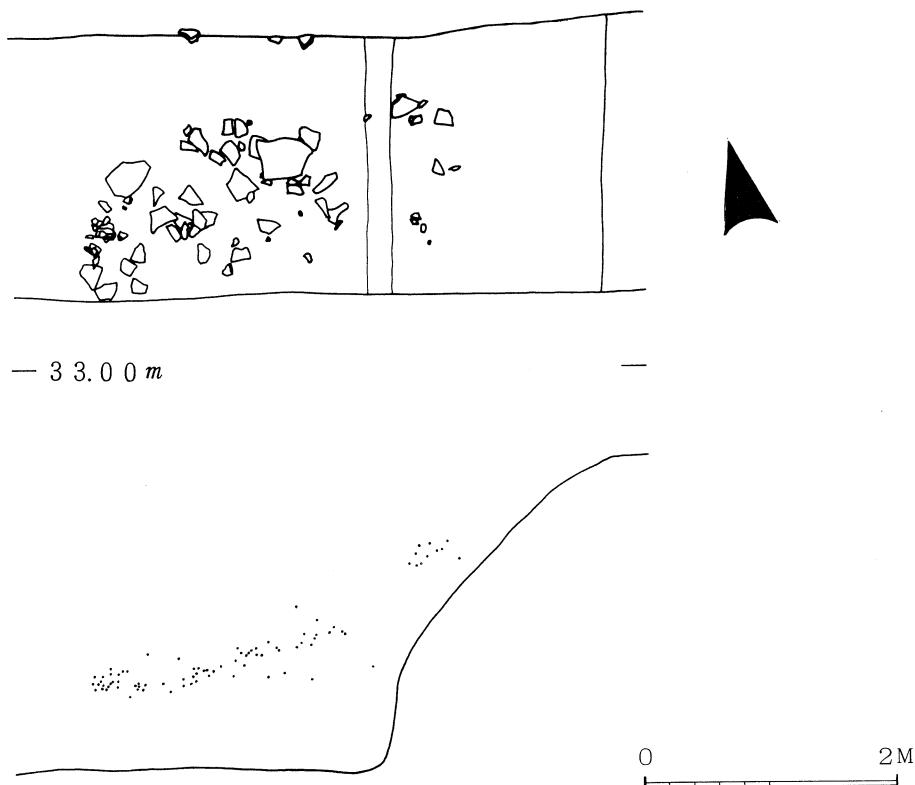
d 西第2トレンチ

トレンチは $1.2 \times 20\text{m}$ を設定し西辺の堀検出にあたった。内堀の規模は幅 3.7 m 、深さ 1.3 m 、底幅 2.32 m を測り、外堀は幅 4.0 m 、深さ 1.3 m 、底幅 2.7 m を測る。外堀の底幅が他に比べてやゝ幅広であるが、堀の形状は他と大きく異なるところはない。内堀と外堀の間隔は 4.9 m 、西辺内郭から外周外上端までは 12.5 m を測る。覆土の堆積状態は他の三辺の堀にみられる、黒（褐）色系統の堆積土が 0.1 m 或は痕跡程度と極端は薄く、上層部分を占める堆積土は内・外堀ともに人為的埋土と考えられるところが、他の三辺とは大きく異なる点である。法面から下層部をレンズ状に占める暗茶褐色系の土は基本的に他の堀の状況と変わることろはなく、土壘の土が流れ込んだものであろう。仮りに本址の存続期間中にある程度堀が埋り始めていたとみると、西辺の堀の異状は、「井上長者館跡」の廃絶時期を識る重要な手掛りとなる。遺物は殆ど検出されおらず図示できるものはない。堀以外に遺構は検出されていない。

e 東トレンチ

トレンチは、 $1.2 \times 40\text{m}$ を設定したが、検出された遺構は内堀と外堀のみである。内堀は幅 3.55 m 、深さ 1.2 m 、底幅 1.84 m を測り、外堀は幅 3.79 m 、深さ 1.2 m 、底幅 1.74 m である。堀の形状、覆土の堆積状況は南・北辺の各堀と概ね大差ないが、他と比較してやゝ幅狭な点が数値の上からも窺える。堀の間隔は 5.0 m を測り、東辺内郭から外周外上端までは、 12.0 m を測る。堀底の傾斜方向については、底面の標高が東辺内堀で 31.53 m ・外堀 31.36 m 、西辺内堀 31.37 m ・同外堀 31.20 m 、北辺内堀 31.28 m 、同外堀 31.42 m 、南辺内堀 31.01 m 、同外堀 31.15 m と、南辺の内・外堀が最も低い数値を示すが、内堀と外堀とでは最高点にバラつきが認められ必ずしも一方向の流れとはならない。外堀は北辺から東辺・西辺を巡って南辺へ抜け、内堀が東辺・西辺から北辺・南辺へという傾向が認められる。東辺外堀には外郭北方へほぼ同軸方向に走る支溝が取りついているのが昭和37年撮影の航空写真（第1図）から窺えるのであるが、郭外へ延びる支溝は他にも南外堀に二本接続している様子が認められる。こうした支溝の存在は堀の機能を考える上に必要不可欠であり、本址の性格を追究する上でとても重要である。既に遺跡の北東コーナー部は大き

く削平されており、堀の一部と支溝一本を失ったことは残念なことである。東辺外堀からは須恵器甕片が集中出土している（第6図）。状況からみて投棄性の強いものであり、暗茶褐土系統（8～10層）の上面に小破片で散乱している。甕の胴部片ばかりが4個体程度識別できる。堀下層部の覆土（暗黄茶褐系の土）は堀の機能と密接に関わる問題であり、捉えかたによっては本址の年代観に少なからず影響する遺物である。



第6図 東トレント外堀遺物出土状況

(3) 遺構の規模

堀の計測値をまとめてみると、

(単位: m)

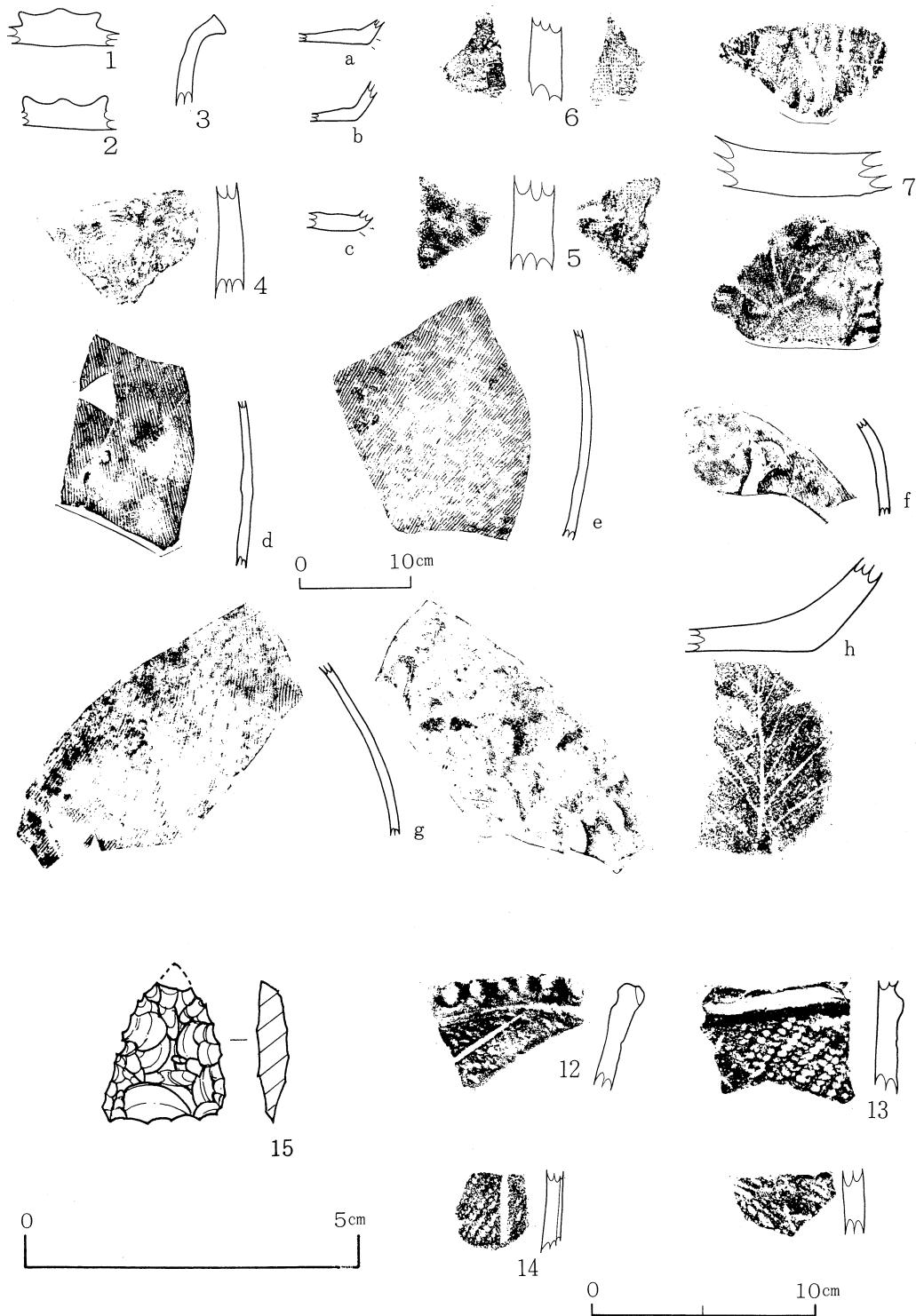
		上端幅	下端幅	内・外堀の間隔		上端幅	下端幅
西辺	外堀	4.0	2.7	4.7	内 堀	3.7	2.3 2
東辺	外堀	3.7 9	1.7 4	4.6 6	内 堀	3.5 5	1.8 4
北辺	外堀	3.8 5	2.2 1	4.7 5	内 堀	3.6	2.1 3
南辺	外堀	4.3 7	2.2 4	4.4	内 堀	3.9 8	2.3

となっており、各辺の内外堀の両外上端間は、西辺 12.4 m、東辺 12.0 m、北辺 12.2 m、南辺 12.75 m を測る。この計測値を基に推定される本址の規模は、外堀外上端の東西間が 120.5 m、南北間 119.72 m のほぼ正方形プランになり、内堀外上端の東西間は 103.35 m、南北間は 102.35 m となる。内堀に囲まれた郭内部は東西が 96.1 m、南北 94.77 m を測り、9000 m²強の面積を有することになる。外堀を含めた本址の総面積が約 14,500 m² であるから、内郭は全体の 6 割を占める計算になるが、堀の内外に土塁がめぐることを考え合わせると、本址の地割配分の約 5 割は二重にめぐる堀と土塁によって占められることになる。

井上長者館跡は見た目にも端正な正方形プラン（第 1 図）を呈すが、このことは測量結果にも現れており、東西間、南北間の各上端間隔、下端間隔を計測した結果、本址のセンターは今回使用した方眼図に照した場合、調査基点「0」より北へ 18.199 m、東へ 14.788 m の地点にあり、センター値の誤差は東西間で 0.47 m、南北間では 0.275 m という高精度な技術と企画性が認められる。1 尺 = 0.30 m として概ね 400 尺四方の規模を有することになろう。尚、井上長者館跡の主軸方位は、外堀南東コーナーで堀の覆土を一部分視認したことにより、磁北方位で N - 18° - E の方向と思われる。

(4) 遺構内検出遺物・表採遺物（第 7 図、PL 5）

1 は須恵器蓋鉢部片で南トレンチ外堀中層の遺物である。色調は灰白色で砂粒をやゝ多く含む胎土は緻密である。2 の胎土・色調もほぼ 1 と同様であるが表採品である。3 は瓶の口縁部片で内外面刷毛塗による灰釉が施される。南谷津方面での表採品である。d ~ g は東トレンチ外堀出土の一括品で各々別個体であるが、口縁部・底部は未検出である。外面はいずれも平行タタキ目文で、d・e の内面は横位のヘラナデ、g は同心円状のアテ具の角を押しあてた圧痕である。h は土師器甕底部片で内面は黒色を呈する。北トレンチ内堀の遺物である。他に、古瓦片（5～7）、須恵器坏片（a～c）、縄文土器片（12～14）石鏃（15）等があるが総て表採品である。a～c の須恵器坏底部と a・c の体部下端にはケズリ調整が認められる。



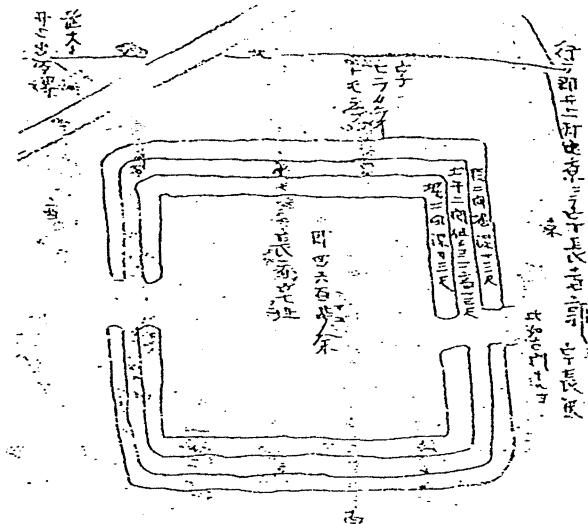
第7図 遺構内検出遺物・表採遺物

IV おわりに (第8図)

今回の調査成果をもって本址の全体像を語ることは難しいが、事実報告に加えて二、三補足しておきたい。

第8図は「高野（助）家文書」（年代不詳）の中にある長者郭の絵図（当地がすでに井上村と呼ばれている頃のもの）であるが、西辺と東辺の堀が中央付近で切れた様子が描かれている。西第1トレンチは丁度この西辺の切れた部分にあたった訳で、これが後世の切崩しではなく郭構築当時より陸橋であることを証明した結果となっている。恐らく東辺でも内郭と郭外が繋っていることはほぼ間違いない、陸橋が直線上に同程度に描写されている点は興味深い。本文でも触れたように二重堀は内郭に匹敵する面積規模で企画されている。この外堀とこれに接続する支溝の関係は一連の構造物として捉えることが可能であり、郭をめぐる二重堀の単なる防禦的意義づけに加えて一時的な貯水機能或は流水機能で郭周辺部を畠地化するといった堀のもつ日常生産的な役割をも示唆しているようである。遺構の年代観であるが全体的に遺物に乏しく堀覆土内の須恵器壺蓋鉢（第7図-1）や、須恵器甕片（第7図d～g）が本址の時代に比較的近しい遺物と思われるので、郭中の表採品をもって図を補った。ここに掲載した須恵器から年代を絞りこむことは至難であるが、概ね8世紀から10世紀の域を出ることはなかろう。郭の廃絶期と堀の埋没開始時期をどう捉えるかという問題も重要であるが、奈良・平安時代に後続する遺物が、少ない遺物量の中にも皆無であった点を付け加えておきたい。本址の正方形プランには高度な技術力と企画性を実現する緻密な施工力を認めることができるが、この技術（集団）力を誰が何処から導入したのか、仮りに「井上長者」の政治的・経済的背景を考える時、本址の占地と地理的景観の必然性のなかに、その手掛かりは潜んでいるように思われる。

ここ玉川地区は、近くゴルフ場建設に伴なう大開発の波に覆われることになるが、かつて「夜刀の神」と闘い谷津田を開いていった遠い祖先達は千数百年ぶりの大開発をどのような思いでみていることだろう。風土記の伝承地は今大きくその姿を変えようとしている。



第8図 「高野（助）家文書」より

写 真 図 版

P L 1



航空写真にみる井上長者館跡

PL2



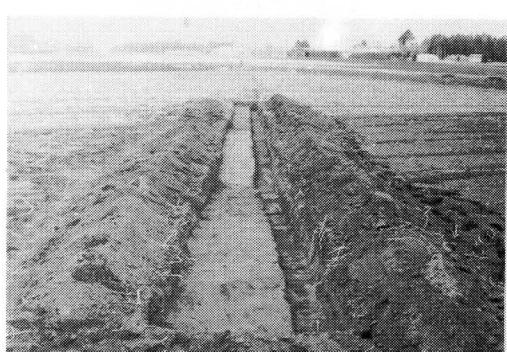
西第1トレンチ



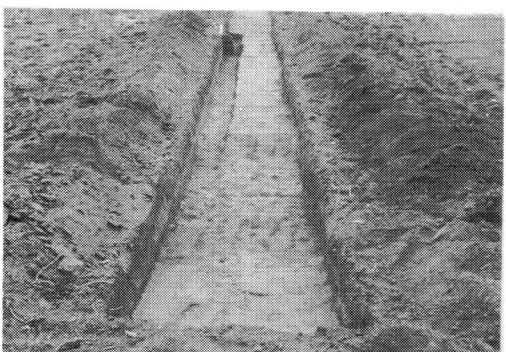
西第1トレンチ断面



東トレンチ



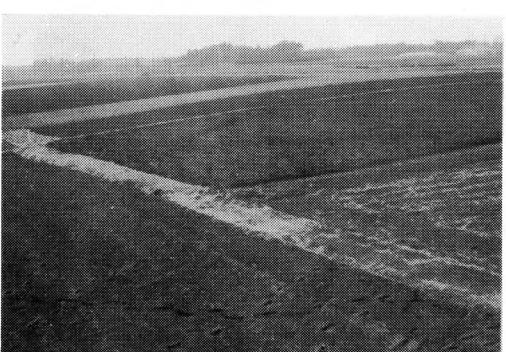
西第2トレンチ



南トレンチ



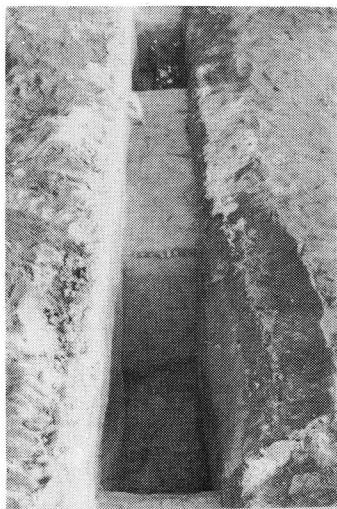
北トレンチ



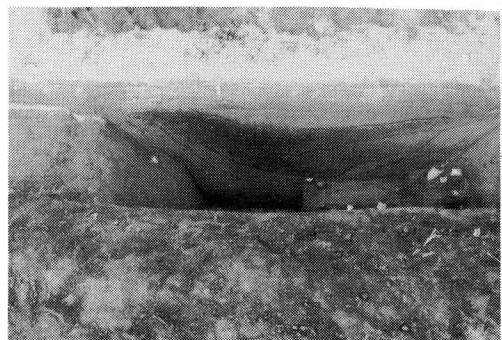
南西部コーナー・外郭へのびる溝



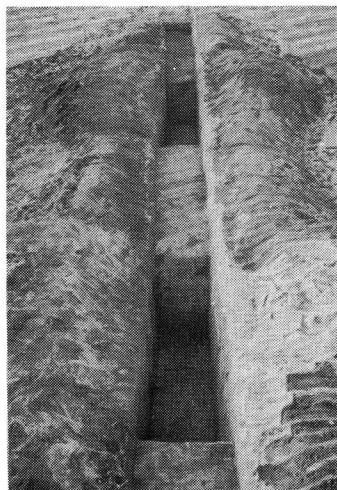
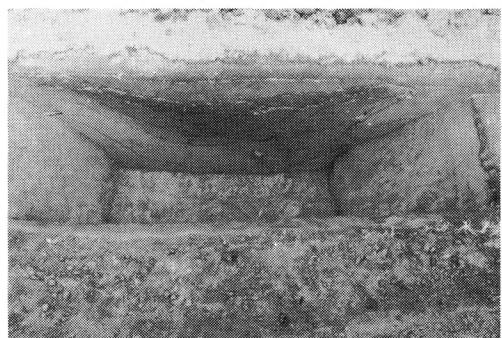
東トレンチ外堀・遺物出土状況



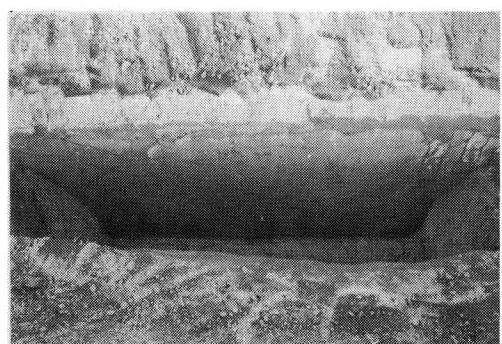
東トレンチ（西から）



右 上 東トレンチ外堀
右中上 同 内堀

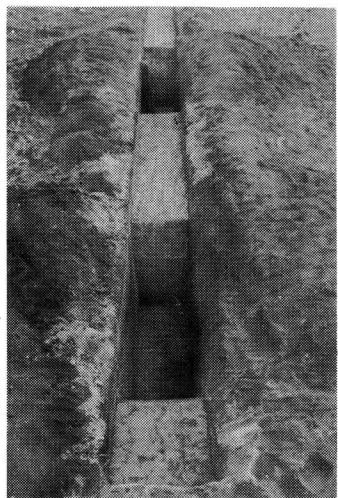


西第2トレンチ（東から）



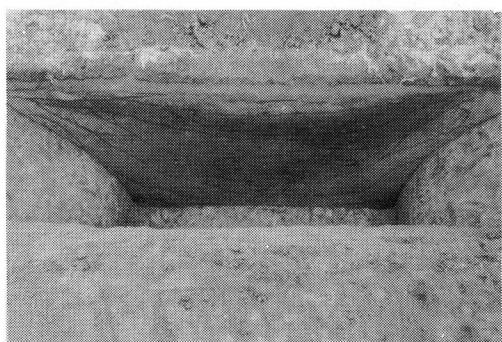
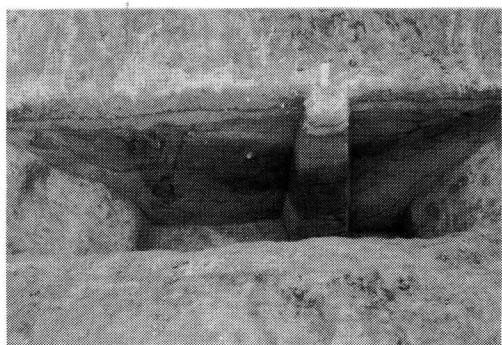
右中下 西トレンチ外堀
右 下 同 内堀





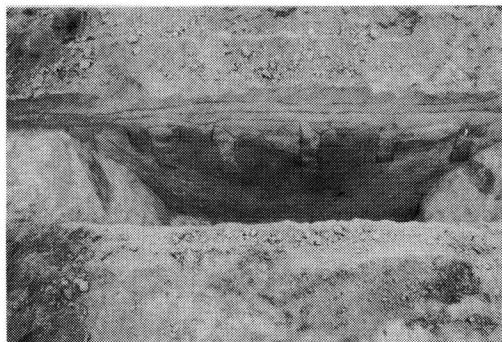
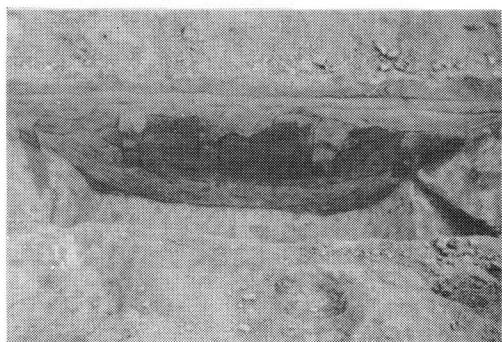
南トレンチ (北から)

右 上 南トレンチ外堀
右中下 同 内堀

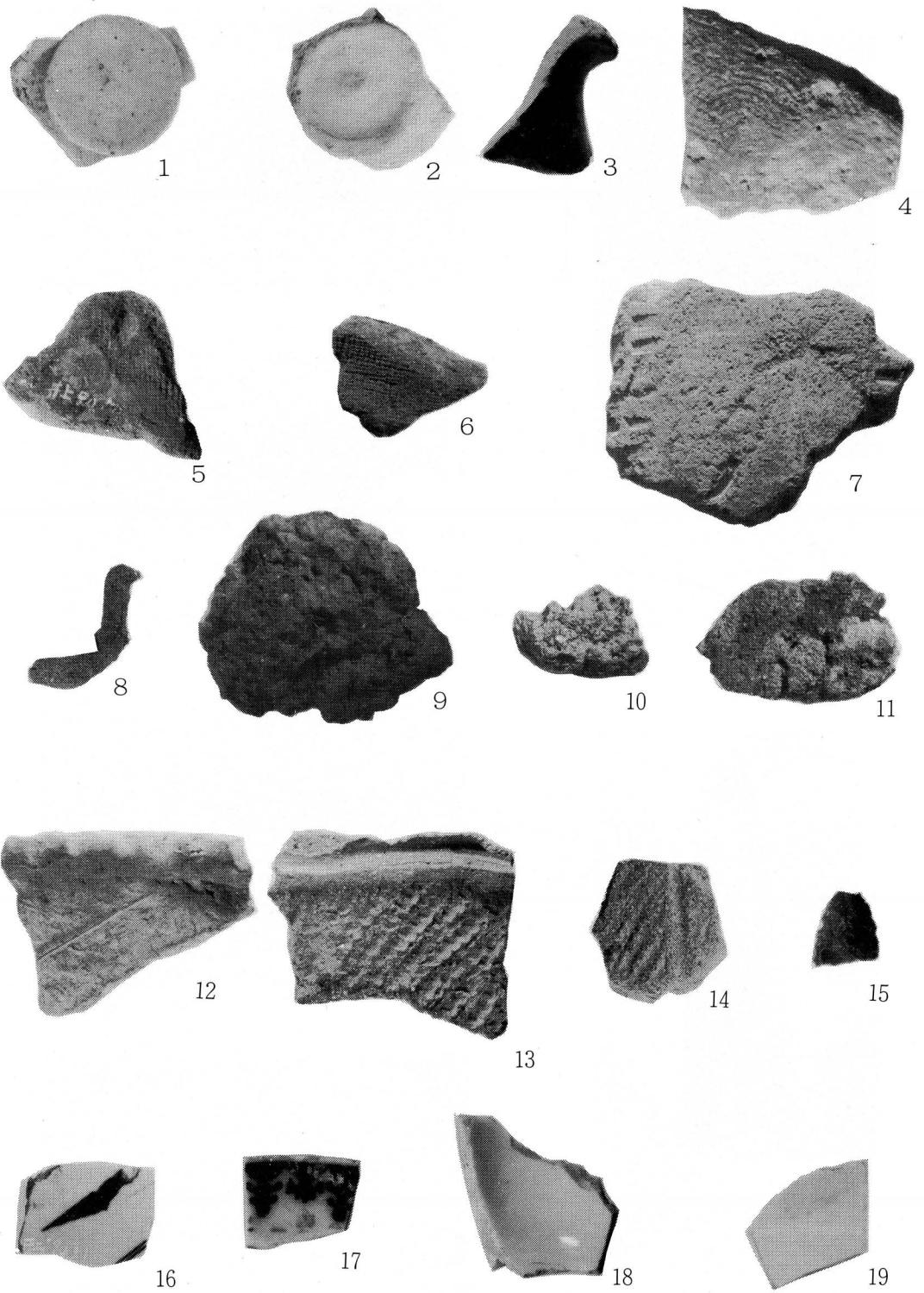


北トレンチ (南から)

右中下 北トレンチ外堀
右 下 同 内堀



PL 5



出土遺物・表採遺物

行方郡井上長者館跡確認調査報告書

1990年3月31日

編集 玉造町遺跡調査会

発行 玉造町教育委員会

印刷 (株)さんゆう社印刷